

2-4

教師による家庭学習充実と授業との連動の取り組み状況

Benesse 教育研究開発センター 小林 洋

はじめに

今回の教師に対する調査の項目は、家庭学習・宿題の指導状況の実態に関わる項目や、取り組みの成果と課題認識など教師の意識に関わる項目など多岐にわたっている。本節では、本章第1節の「授業改善と結びつけた家庭学習充実の教師の取り組み」の構造モデル（以下、「構造モデル」と称する）に示している「家庭学習指導力」「家庭学習と授業との連動」の項目に重点を置き、教師による家庭学習の充実という視点からの学力向上の取り組みの現状を報告する。

1 家庭学習の充実に関わる教師の取り組み状況

図表2-4-1は、家庭学習充実の取り組み（「家庭学習指導力」の発揮）に関する項目に対する教師の回答状況を示すものである。この項目は、本章第1節の「構造モデル」の「E. 家庭学習指導力（Enrich）」に該当しており、「学力向上のための基本調査2004」で提唱した一般的な「教師の指導力」（FAN）モデルの枠組みを踏まえた項目となっている（「FAN」とは、Foundation：「授業の土台づくり」、Approach：「学習指導の方法」、Navigation：「学習の方向づけ」の頭文字をとったものである（詳細はBenesse教育研究開発センターのWebサイト参照）。また、今回の調査におけ

る「教師の指導力」発揮状況を示す回答結果は、図表2-4-5を参照）。この項目は、図表2-4-1に示すように、次の6つのカテゴリーに分け、それぞれに代表的な4つの具体的な項目を設定している。

- E-1. 家庭学習の習慣化促進
- E-2. 自作教材やノート活用の工夫
- E-3. プロジェクト的課題の導入
- E-4. 基礎的指導の充実
- E-5. 家庭学習のガイダンス
- E-6. 家庭学習の点検・評価と指導

1 学習習慣化や放課後等の補充指導には大半の教師が取り組んでいる

図表2-4-1を少し詳しく見ていこう。

各設問項目が自分の行っている取り組みとしてどの程度あてはまるかという問いに対して「とてもあてはまる」とする積極的な回答の割合が最も高いのは、小学校では、「宿題をやってこない子どもや家庭学習が十分でない子どもに対しては、始業前や休み時間、放課後等にやらせるようにしている（問6-14）」（41.2%、「どちらかと言えばあてはまる」の回答合計で85.3%）、次いで「量や頻度にムラがないように、宿題を出すようにしている（問6-13）」（38.0%、同87.3%）、「長期休業中には、ふだんやりにくい課題や十分に習熟で

きていない課題等を優先的に出すようにしている（問6-15）」（35.7%、同83.8%）となっている。中学校では、「とてもあてはまる」とする積極的な回答の割合が最も高いのは、「毎日かならず今日の授業の振り返りや次の授業への準備をすること等を習慣づけるようにしている（問6-1）」（24.1%、同73.8%）、次いで「長期休業中の対応（問6-15）」（22.1%、同71.5%）、「市販の教材やドリル等のみならず、自作のプリントや課題等も宿題として出すようにしている（問6-6）」（21.6%、同62.1%）となっている。

前節で、宿題だけでなく自主的な学習に取り組

むことの大切さを確認したが、これに関連する「教科の特性や子どもの年齢に応じて、自主的・主体的な家庭学習へと移行していけるように指導している(問6-3)」という項目では、小学校では22.8%(同79.2%)、中学校では7.2%(同60.5%)となっており、取り組まれている割合が相

対的に高い項目の中に入っている。ここまでにあげた項目は、「E-4. 基礎的指導の充実」「E-1. 家庭学習の習慣化の促進」「E-2. 自作教材やノート活用の工夫」のいずれかの領域に属するものであり、これらの領域での取り組みが行われている割合は全体として相対的に高くなっている。

2 「調べ表現する課題」等、プロジェクト的課題の導入の割合は低い

反対に、どの項目についても小・中学校ともに「とてもあてはまる」という回答の割合が1割に満たないのが「E-3. プロジェクト的課題の導入」の領域である。「本や文章、資料を読み、自分の考えや意見、批評等を書かせて読解力を高めるような課題を宿題として出すようにしている(問6-10)」の項目では、小・中学校ともに5%未満、「どちらかといえばあてはまる」との回答合計でも3割に満たない。その他「あるテーマについて調べたり、その結果や考えを表現させたりする課題や活動を宿題として出すようにしている(問6-9)」や「授業で学んだことをふだんの生活や自分のことに結び付けて、身の回りの問題や課題の解決にあたらせるような宿題を出すように

している(問6-12)」等についても同様に低調である。これらは、知識・技能の定着・習熟のためのドリルなどの課題に比べて、課題を準備すること自体の難しさやきちんと子どもに取り組ませることの難しさを表していると考えられる。しかし、本章前節で見たように宿題の課題も総合的に設計されることが大切であることを考えると、現状の宿題の出し方への見直しの必要性を示す結果となっているのではないだろうか。

この領域に次いで、「E-5. 家庭学習のガイドンス」や「E-6. 家庭学習の点検・評価と指導」の領域についても取り組みの割合が低い項目が多い。

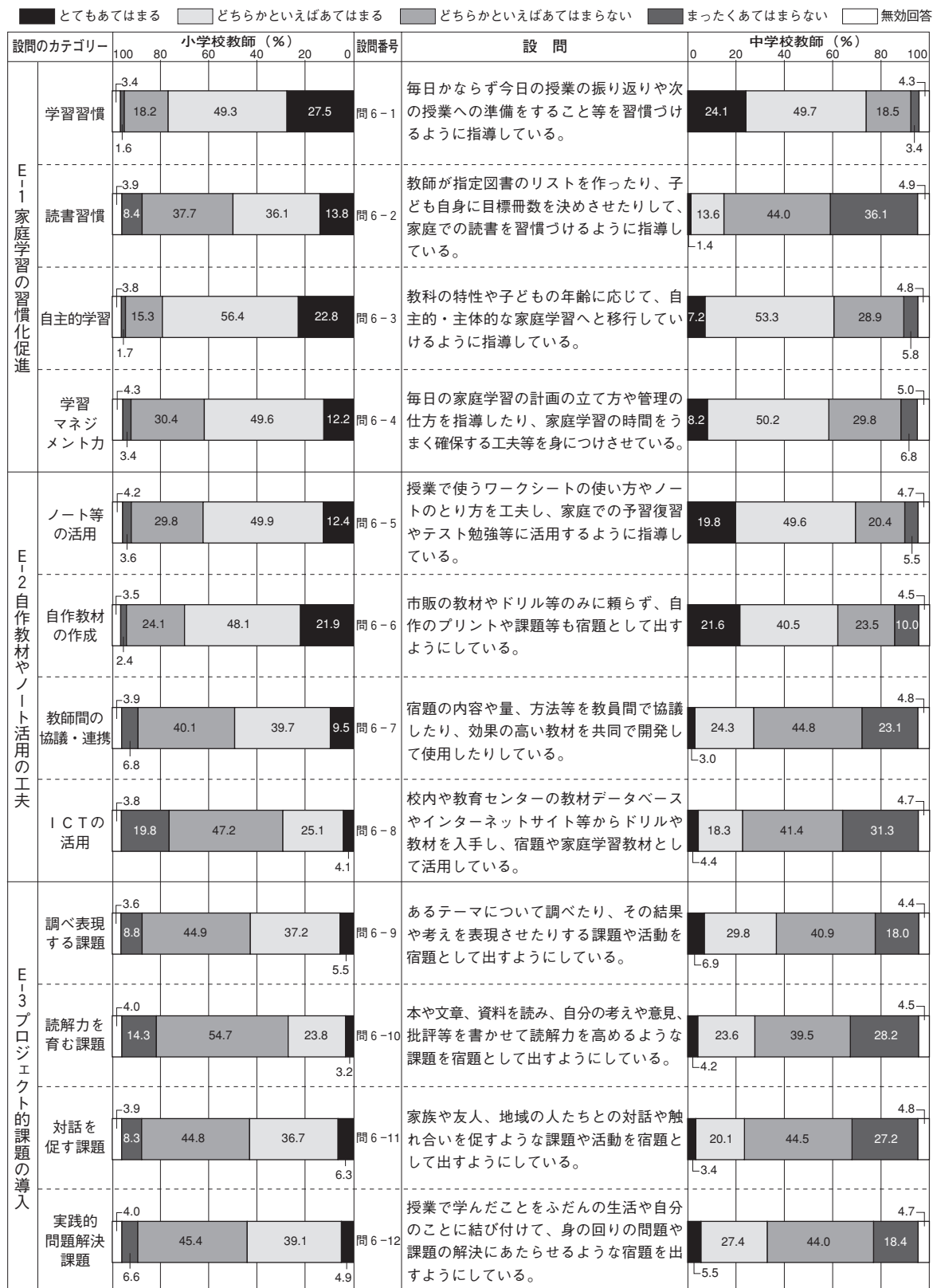
3 取り組んでいる割合が5割を超える項目は小・中学校ともに半分に満たない

全体を通して見ると、「とてもあてはまる」という積極的な回答の割合が3割を超える項目は、小学校教師の「E-4. 基礎的指導の充実」の領域の3項目(「定期的・定量的な出題」「放課後等指導の補充指導」「長期休業中の対応」)のみであり、中学校教師においては3割を超える項目はない。また、「とてもあてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の回答合計の割合で見ても5割を超える項目は、小学校では24項目中11項目、中学校では24項目中10項目となっている。このことは、あとで校長の回答に見るように、家庭学習を学校の基本方針の中にきちんと位置付けて学校全体として推進を図ろうとしている学校の割合が現状では低いことと照応していると考えられる。

なお、「ノート等の活用(問6-5)」や「評価規準の明示(問6-24)」のように中学校のほうが小学校を上回る項目も一部にある。しかし、小学校と比べて中学校の家庭学習充実の取り組みは全体として弱いことがうかがえる。これは、中学校段階になると教科担任制であることによって生じやすい他教科との調整の壁や、通塾率が高まる上に部活動も加わって子どもが忙しくなるという教師の認識など、小学校段階とは異なる要因が背景になっていると推察される。

次に、家庭学習の充実に関連する「家庭学習の習慣化の工夫」や「宿題に積極的に取り組ませる工夫」について見ていくことにする。

図表 2-4-1 教師の「家庭学習指導力」発揮の状況



設問のカテゴリ	小学校教師 (%)					設問番号	設問	中学校教師 (%)					
E-4 基礎的指導の充実	定期的出題	4.1	6.4	49.3	38.0	問6-13	量や頻度にムラがないように、宿題を出すようにしている。	10.5	41.5	29.6	13.6	4.8	
	放課後等の補充指導	2.3	3.6	8.8	44.1	41.2	問6-14	宿題をやってこない子どもや家庭学習が十分でない子どもに対しては、始業前や休み時間、放課後等にやらせるようにしている。	16.4	44.5	24.8	10.0	4.3
	長期休業中の対応	3.6	11.3	48.1	35.7	問6-15	長期休業中には、ふだんやりにくい課題や十分に習熟できていない課題等を優先的に出すようにしている。	22.1	49.4	18.3	4.0	6.2	
	個に応じた課題	1.3	3.8	8.3	44.5	37.2	問6-16	クラス共通の課題に加えて、子どもの理解状況や興味・関心等に応じた個別的な課題も宿題として用意している。	23.8	48.9	19.3	5.5	2.4
E-5 家庭学習のガイダンス	保護者への協力要請	4.1	26.9	50.6	15.4	問6-17	保護者に対して、家庭学習の充実に向けての協力や応援が得られるよう、具体的な事例と共に説明している。	32.0	40.7	17.3	5.3	4.7	
	家庭学習教材の紹介	3.0	3.8	12.4	51.2	29.4	問6-18	家庭学習教材として適切な教材や方法を保護者や子どもの要望に応じて紹介している。	24.6	44.5	22.8	5.4	2.6
	家庭学習の手引活用	4.2	26.6	42.9	20.0	問6-19	家庭学習の意義や役割から、計画の立て方、具体的学習方法、評価規準等をまとめた「家庭学習の手引き」等を作成し、随時活用させている。	25.2	41.0	25.2	5.3	3.3	
	家庭学習の指南	4.3	28.4	53.4	9.4	問6-20	子どもたちの家庭学習上の悩みや相談に個別に応じたり、具体的な方法やコツを指導したりしている。	11.0	54.4	23.5	5.0	6.2	
E-6 家庭学習の点検・評価と指導	ポートフォリオの活用	3.8	13.2	39.7	33.1	10.3	問6-21	授業で用いたプリントやテスト、作品等と一緒に宿題や家庭学習の成果もポートフォリオとして管理させ、成長や課題を振り返らせている。	7.9	29.6	38.2	18.9	5.3
	課題提出の指導	4.6	9.5	37.7	39.6	8.7	問6-22	探究的課題など中長期的な宿題を出した後は、引っ掛かっている点の確認や指導、念押し等をして必ず提出させるように指導している。	30.6	39.5	18.0	6.3	5.5
	取り組みへの仕掛け	4.1	27.5	47.7	16.1	問6-23	子どもたちの家庭学習への取り組みに対して色々な報奨の仕掛けを工夫する等してやる気を高めるようにしている。	33.5	38.1	15.9	5.8	6.7	
	評価規準の明示	4.4	9.0	43.2	38.8	問6-24	家庭学習の成果に対する評価規準や判断基準を明確に示すとともに、成績にしっかりと反映させている。	12.5	40.0	29.6	12.2	5.7	

注) 「ここ3年間において、あなたが子どもたちの家庭学習の充実に向けて取り組んでいることとして、次のようなことはどの程度あてはまりますか?」の設問に対する回答状況を示す。「設問のカテゴリ」欄に示した記号や番号は、第2章1節の「授業改善と結びつけた家庭学習充実の取り組みの構造モデル」内の項目との対応を示す。なお、上記の項目は、これらの項目のすべてが実践されていることが望ましいという前提に立ったものではなく、取り組みの実態を調べ、総合学力等との関係を調べるためのものである。このことは他の調査項目についても同様である。

家庭学習の習慣化のために、小学校では「課題の量の適切な設定」が最も重視されており、中学校との差が大きい

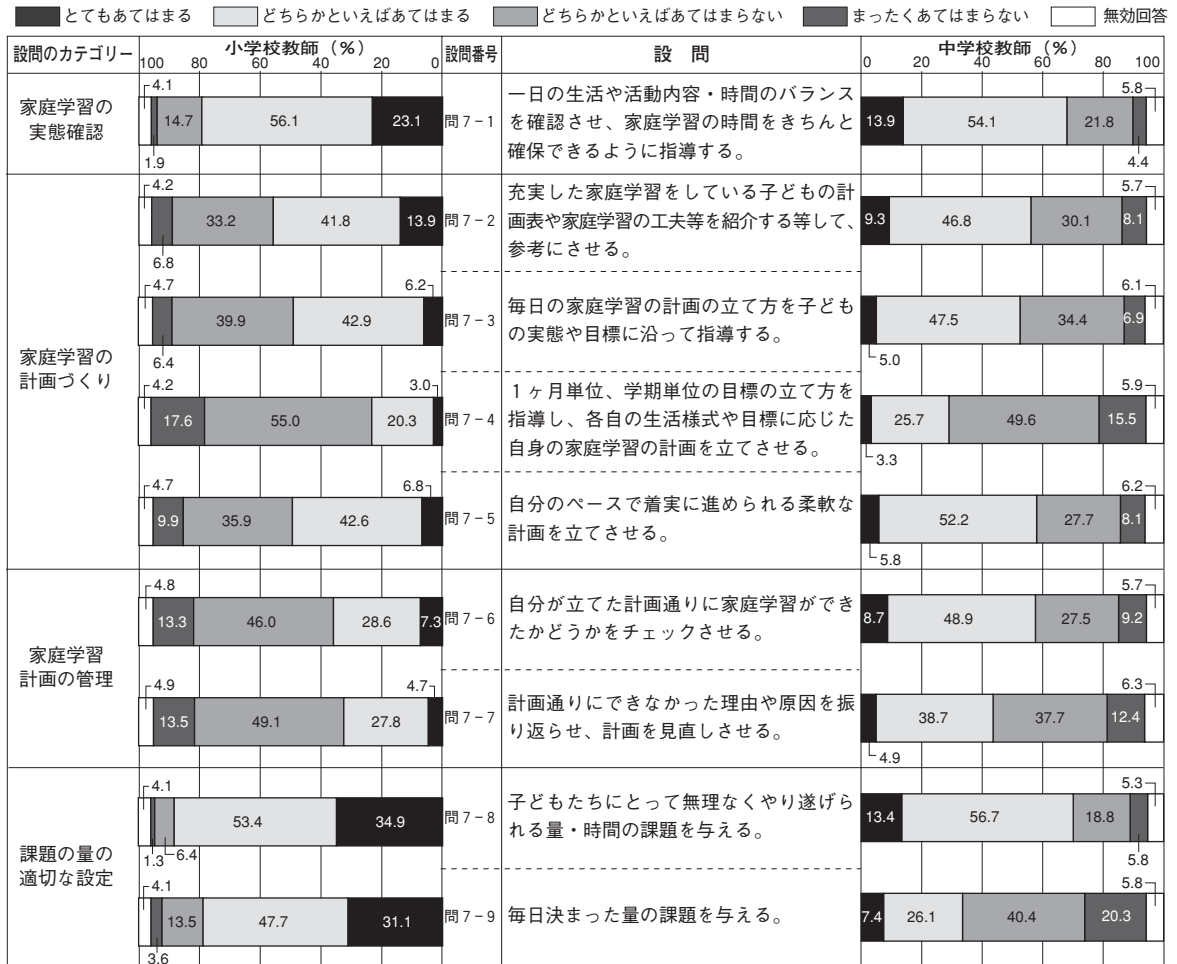
図表2-4-2は、家庭学習の習慣化や効果的に取り組ませるために教師がどのような工夫を行っているかを示すものである。

小学校では、「子どもたちにとって無理なくやり遂げられる量・時間の課題を与える(問7-8)」ことや「毎日決まった量の課題を与える(問7-9)」という「課題の量の適切な設定」が家庭学習の習慣化の上で最も重視されていることがうかがえる。しかし、「家庭学習の計画づくり」の指導や家庭学習を計画どおり進めさせるための「家庭学習計画の管理」にまで踏み込んでいる教師の割合は、「とてもあてはまる」「どちらかといえばあてはまる」という回答合計では5割前後に達する項目もあるものの、「とてもあてはまる」という積極的な回答は、「充実した家庭学習をしている子どもの計画表や家庭学習の工夫等を紹介する等して参考にさせる(問7-2)」という取り

組みが13.9%であることを除き、どれも1割に満たない。

中学校では、小学校よりも「家庭学習の実態確認(問7-1)」や「課題の量の適切な設定(問7-8・9)」の取り組みの割合がかなり低い。とりわけ「毎日決まった量の課題を与える(問7-9)」という項目は、小学校との差が最も大きく開いており、「とてもあてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の回答合計で45.3ポイントの差がある。しかし、「自分で立てた計画通りに家庭学習ができたかどうかをチェックさせる(問7-6)」等の「家庭学習計画の管理」の指導や、「1ヶ月単位、学期単位の目標の立て方を指導し、各自の生活様式や目標に応じた自身の家庭学習の計画を立てさせる(問7-4)」といった「家庭学習の計画づくり」の指導では、中学校のほうが小学校よりも取り組みの割合がやや上回る傾向が見られる。

図表2-4-2 家庭学習の習慣化の工夫



注)「あなたは、ここ3年間において、子どもたちが家庭学習を自分のものとして習慣化させ、より効果的に行えるようにしていくためにどのような点に留意して指導していますか?」の設問に対する回答状況を示す。

5 宿題の個別的指導は大半の教師が行っている

図表2-4-3は、子どもに宿題に積極的に取り組ませるために教師がどんな工夫をどれくらい行っているかを示したものである。

自分の行っている工夫として、「とてもあてはまる」という積極的な回答の割合が最も高いのは、小学校では、「提出できていない子どもに対して個別に指導する(問8-12)」(47.5%、「どちらかといえばあてはまる」との回答合計で92.4%)、次いで「宿題をていねいに点検し、個別にコメントやアドバイスを返す(問8-13)」(33.2%、同85.4%)、「宿題の成果や作品を授業の中で活かす(問8-7)」(18.4%、同77.5%)となっている。小学校では大多数の教師が、程度の差はあれ、子

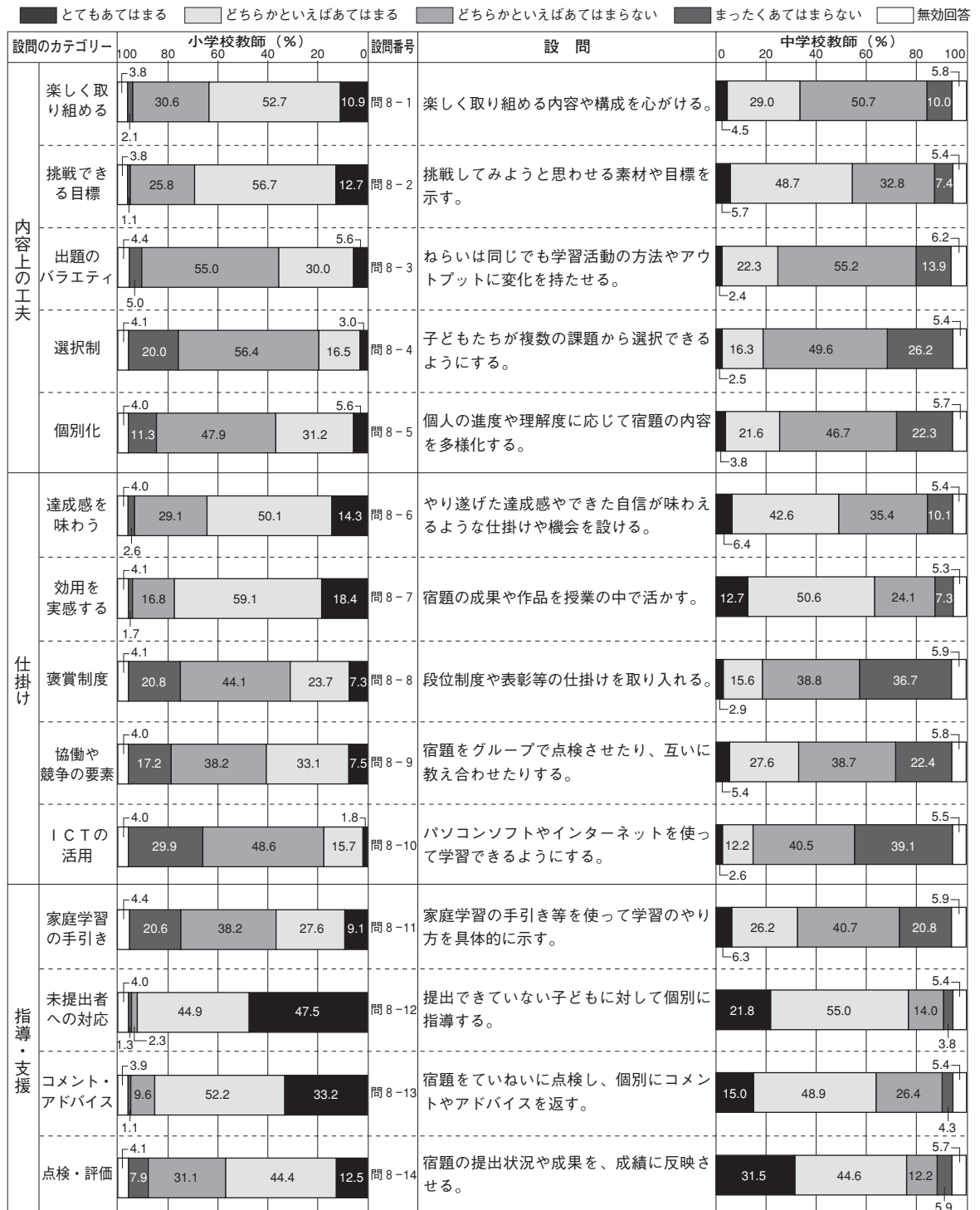
どもに宿題に積極的に取り組ませるための個別的な指導や宿題の成果を授業の中で活かす取り組みを行っていることがわかる。中学校においても「未提出者への対応(問8-12)」については、「どちらかといえばあてはまる」までの回答合計では76.8%となっている。

前節で見たように、とくに宿題の成果を授業の中で活かし、子どもに宿題の役立ち感を実感できるような工夫を行うことと、子どもの宿題への取り組み度合いや宿題の効果認識とは、小5生・中2生ともに正の相関関係にあり、次項で見る家庭学習と授業との連動に関わる取り組みとして、より重視されていくことを期待したい。

小学校に比べ中学校では、宿題に積極的に取り組ませるような工夫に関わる項目は全般に低く、「宿題の提出状況や成果を成績に反映させる(問

8-14)」という項目が、中学校のほうが小学校よりも行われている割合が顕著に高い唯一の項目となっている。

図表 2-4-3 宿題に積極的に取り組ませるための工夫



注) 「ここ3年間において、子どもたちが宿題に積極的に取り組めるようにどのような工夫をしていますか?」の設問に対する回答状況を示す。『中間報告』(2008年11月発刊)で紹介したもの比べて全体的に数値がやや低いのは、無効回答を分母に含めて再計算していることによる。

2 家庭学習と授業との連動に関わる取り組み状況

家庭学習と授業との連動は、全国各地で取り組まれている「授業と家庭学習の一体化」「～サイクリカル化」「～システム化」「～有機的なリンク」等の言葉で呼ばれている学力向上施策の一つと軌を一にするテーマである。図表2-4-4は、教師のこの「家庭学習と授業との連動」に関わる取り組み（「構造モデル」にある「授業連動力」の発揮）の状況を示している。

この取り組みには、今回の調査では、図表にある通り次の4つのカテゴリーを設定し、それぞれについて代表的な4つの具体的な項目を設定している。

- L-1. 家庭での予習を前提とすることで授業への参画意識を高め、授業の密度を高める取り組み
- L-2. 家庭学習を通じて、授業内容の一層の定着・習熟を図る取り組み
- L-3. 応用発展的な家庭学習を通じて、授業内容の一層の深化・拡大を図る取り組み
- L-4. 自主的・継続的な家庭学習を通じて、子どもの主体的学習習慣確立を図る取り組み

1 家庭学習と授業を結びつけた取り組みは現状では弱い

図表2-4-4からわかる通り、全体を通して「よくしている」という積極的な回答の割合が3割を超える項目はない。この割合が最も高いのは、小学校では、「授業中に宿題の答え合わせや宿題内容に沿った確認テストをして、つまづき箇所の発見と解消に努めている（問10-8）」という項目であり（20.5%、「どちらかといえばしている」との回答合計で70.9%）、次いで「間違いやすい問題やテストによく出る問題等を精選・体系化した宿題を出している（問10-5）」（16.8%、同61.7%）、「予習ノート等を提出させて点検したり、子ども同士で確認させたりして、宿題を出しっぱなしにしないようにしている（問10-4）」（16.1%、同47.8%）となっている。中学校では、「よくしている」の回答の割合が最も高いのは、「次の授業で学ぶ教科書の内容を読んだり、語句の意味を調べたり、関連する資料を調べておく等、予習する事柄と方法を明確に伝えている（問10-1）」という項目であり（17.9%、同47.8%）、次いで「漢字や計算、英語等の自主的・継続的な家庭学習の成果を検定試験等で確かめてみることを推奨している（問10-15）」（17.8%、同48.2%）となっている。問10-1の項目では、「よくしている」割合が、問10-15では「よくしている」割合ならびに「どちらかといえばしている」の回答

合計がともに、小学校よりも中学校の回答割合が高い項目となっている。この2つの項目以外は、すべて中学校のほうが小学校より低い。

「よくしている」「どちらかといえばしている」の回答合計が50%を超える項目は、小学校では16項目中の3項目、中学校では1項目であり、全体として、家庭学習と授業を結びつけた取り組みは現状では弱いことを示す結果となっている。

教師の指導力は、これまで見てきたような家庭学習の充実（家庭学習指導力）や家庭学習と授業との連動（授業連動力）の領域に限定されるものではなく、子どもの学力向上を考える際には、家庭学習の指導やその授業との連動に直接的に関わらない日々の授業における一般的な「教師の指導力」を考慮することも大切である。学校の授業は、「家庭学習ありき」ではないことは言うまでもない。

図表2-4-5は、「教師の指導力」のFANモデルに基づいて設定した項目の回答状況を示すものである（FANモデルの詳細については「学力向上のための基本調査2004」報告書参照）。ここでは、詳細に立ち入ることは割愛し、この「教師の指導力」と上で見た「家庭学習指導力」や「授業連動力」とが全体としてどのような関係にあるかを見ておきたい。

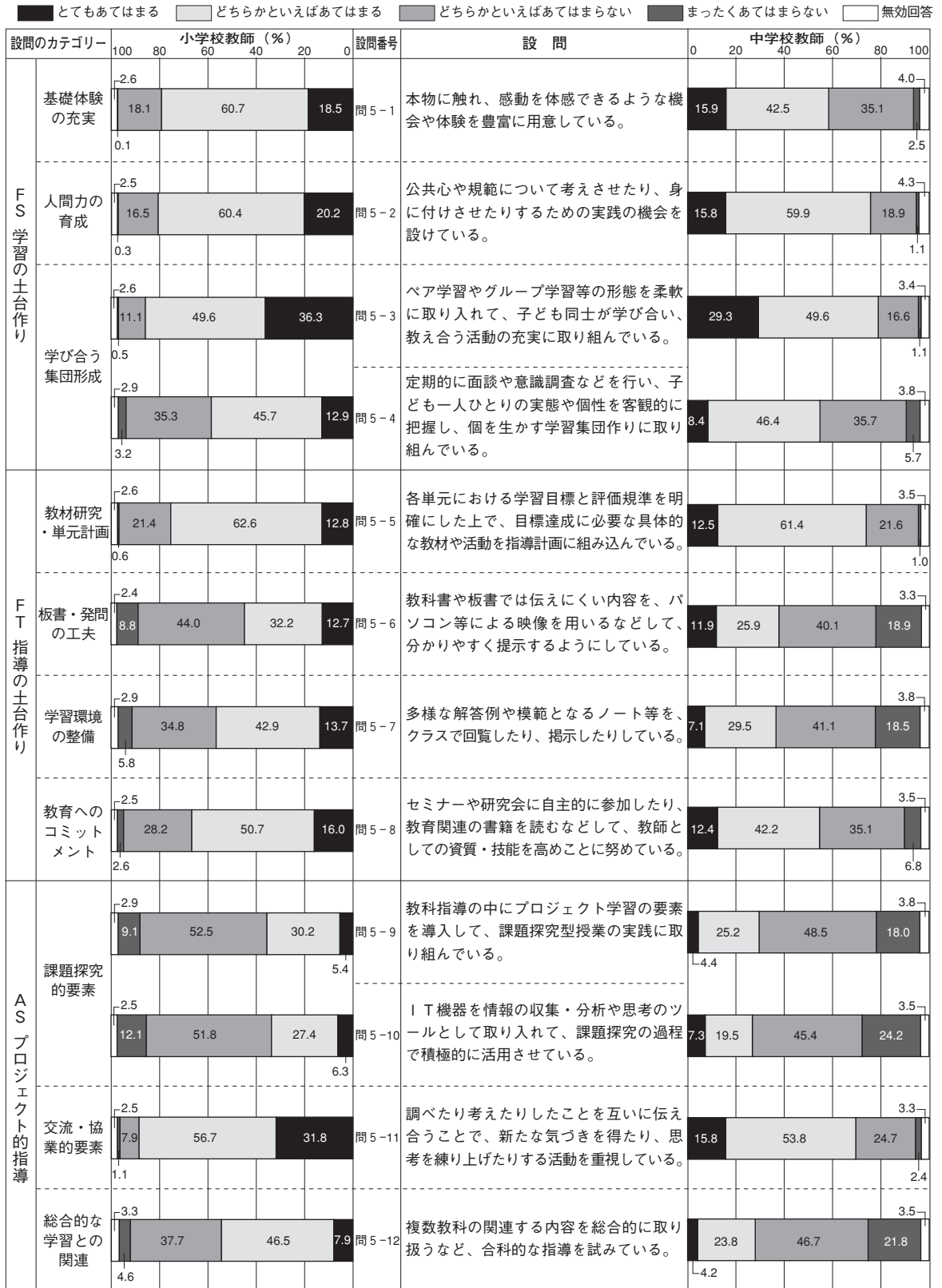
図表 2-4-4 家庭学習と授業との連動(「授業連動力」)に関わる取り組み状況

■ よくしている □ どちらかといえばしている ■ どちらかといえばしていない ■ まったくしていない □ 無効回答

設問のカテゴリー	小学校教師 (%)					設問番号	設問	中学校教師 (%)								
	100	80	60	40	20			0	0	20	40	60	80	100		
授業への参画意識を高め、授業の密度を高める取り組み	予習事項や方法の明確な指示	4.3	31.7	44.9	14.1	問10-1	次の授業で学ぶ教科書の内容を読んだり、 語句の意味を調べたり、関連する資料を 調べておく等、予習する事柄と方法を明 確に伝えている。	5.8	17.9	29.9	31.0	15.4				
	授業計画における予習の精錬化	4.9	4.4	7.8	47.9	34.2	16.1	5.7	5.4	33.2	39.6	16.1				
	予習を活かした授業効率・密度向上	4.8	9.7	44.2	35.3	5.9	26.9	43.3	19.5	5.7	4.7	14.0	28.0	30.1	22.1	
	予習した内容の点検・評価と指導	5.0	13.5	33.8	31.7	16.1	14.0	28.0	30.1	22.1	5.8	14.0	28.0	30.1	22.1	
家庭学習を通じて、授業内容の一層の定着	授業・教材研究と自作課題の開発	4.3	7.1	26.9	44.9	16.8	問10-5	間違いやすい問題やテストによく出る問題等 を精選・体系化した宿題を出している。	5.8	9.3	36.6	32.9	15.4			
	応用的課題遂行を通じた基礎の定着	4.3	16.4	50.4	25.1	3.8	14.9	41.7	35.1	5.8	2.5	14.9	41.7	35.1		
	保護者の関与の促進のしかけ作り	4.4	11.7	38.0	31.1	14.7	14.1	40.2	36.4	5.8	3.4	14.1	40.2	36.4		
	家庭学習課題の指導と評価の一体化	4.2	19.6	50.4	20.5	5.2	15.3	41.5	23.5	14.0	5.8	15.3	41.5	23.5	14.0	
応用発展的な家庭学習を深化・拡大を図る取り組み	家庭学習の遂行の指導と支援	4.6	15.1	49.9	27.5	3.0	問10-9	家庭での調べ学習や自由研究を行う際の 見通しの立て方やスケジュール管理の仕 方を適宜指導している。	6.2	19.7	44.1	28.1				
	調べ学習に関わるスキルの体系的指導	4.4	26.7	51.3	15.8	1.7	11.9	41.0	39.8	5.9	1.9	11.9	41.0	39.8		
	家庭学習の成果の披露と交流活動	4.4	17.2	51.0	23.1	4.2	16.4	43.3	32.5	5.9	1.4	16.4	43.3	32.5		
	授業で学んだことの実生活での応用	4.6	8.7	43.6	37.4	5.8	23.3	42.0	25.3	6.1	1.9	23.3	42.0	25.3		
自主的・継続的な家庭学習を促す取り組み	様々なメディアを用いた情報収集の実践	4.3	18.2	47.5	26.6	3.3	問10-13	新聞や書籍、インターネット等を使って、 色々な出来事やテーマについての情報 を収集したり、まとめたりする宿題を出 している。	5.8	18.7	39.0	33.8				
	自主的・継続的な家庭学習の成果発信の場設定	4.7	24.6	40.6	23.4	6.7	12.2	35.3	44.6	6.2	2.8	12.2	35.3	44.6		
	自主的・継続的な家庭学習の成果の検定での確認	4.4	30.0	33.5	21.7	10.4	17.8	30.4	23.0	23.0	5.9	1.6	17.8	30.4	23.0	23.0
	個に応じた家庭学習カウンセリング	4.2	14.1	42.2	33.2	6.3	25.6	40.6	23.7	6.2	3.9	25.6	40.6	23.7		

(注) 「ここ3年間において、授業や学習指導において宿題を出したり、家庭学習に関する指導を行うに当たって、あなたは次のようなことをどの程度やっていますか？」の設問に対する回答状況を示す。

図表2-4-5 ふだんの授業や特別活動での「教師の指導力」発揮の状況



次ページに続く

図表 2-4-5 ふだんの授業や特別活動での「教師の指導力」発揮の状況（つづき）

設問の categorie	小学校教師 (%)					設問番号	設 問	中学校教師 (%)					
	100	80	60	40	20			0	0	20	40	60	80
A T プログラム的指導	発展的 内容指導	2.9	35.5	48.2	11.9	問 5-13	生活や社会との関わりを意識させて、子どもの関心・意欲・態度をより高次の事象にまで高めさせる指導を行っている。	11.7	49.4	31.4	3.4	4.0	
		1.6											
	課外での 指導	4.3	6.6	39.8	42.9	6.4	問 5-14	グラフの読み取り等に関わる算数・数学の知識や技能を先取りし、社会や理科等での資料活用能力をより確かなものにしていく。	7.3	22.8	39.1	26.0	4.8
		3.8	6.6	29.5	47.1	13.0	問 5-15	課外での学習も単なる自習に終わらずに、学習結果を指導者が点検・評価している。	7.8	41.4	35.3	11.1	4.4
定着指導	2.9	13.2	48.3	32.6	問 5-16	計算や漢字等の習得が不十分な子どもへの指導に際しては、当該の学年にこだわらずに、学年をさかのぼって指導している。	16.9	42.2	24.5	12.1	4.3		
	3.0												
N S 学習ガイダンス	学び方の 指導	3.4	19.2	57.0	18.7	問 5-17	望ましい学習法やノートの取り方、調べ学習の方法などを随時指導し、個別に相談にのっている。	10.6	51.2	29.5	3.7	5.0	
		1.7											
	評価規準 の共有	3.3	9.5	35.8	37.4	14.0	問 5-18	「学習のびき」などを作成し、望ましい学習方法や授業に臨むルールなどを指導している。	15.4	40.7	31.1	9.0	3.8
		3.1	28.1	52.1	15.1	1.7	問 5-19	I T 機器の扱い方や、情報収集の仕方、レポートのまとめ方等のスキルに関するハンドブックを作成し、子どもに活用させている。	12.7	46.2	35.6	3.9	1.6
振り返り 指導	3.5	7.0	44.8	38.7	6.0	問 5-20	単元ごとの評価規準や評価の場面、方法等について、子どもたちに具体的に示し、学習への動機づけをしている。	13.7	49.1	28.8	3.7	4.8	
	3.3												
N T 形成的評価と指導	振り返り 指導	3.3	35.5	43.0	13.1	問 5-21	振り返りノートなどで、毎時間の自分の学習状況や成果を振り返らせ、つまづきや成長に気づかせるようにしている。	8.7	34.6	40.9	12.1	3.8	
		5.1											
	点検と フォロー	3.1	40.0	44.5	8.3	問 5-22	自己評価の観点や方法、目的を理解させるとともに、自己評価力の育成に取り組んでいる。	7.7	45.0	38.2	3.5	5.5	
		4.1											
形成的 評価	3.1	43.6	42.3	5.6	問 5-23	評価規準や判断基準を活用しながら、子どもと一緒に学習の成果と今後の課題を確認している。	3.3	43.8	42.4	3.7	6.9		
	5.5												
	3.4	37.9	45.3	7.8	問 5-24	課題探究等の長期にわたる活動では、中間報告や自己評価の場を設けて、今後の活動の見直しやアドバイスをを行っている。	4.3	36.9	43.1	11.3	4.3		
	5.7												

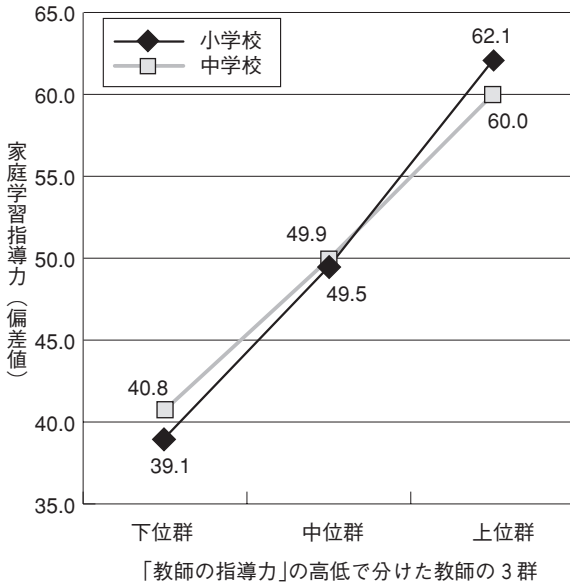
注) 「あなたがこの3年間において、ふだんの授業や特別活動において取り組んでいることとして、次のようなことはどの程度あてはまりますか？」の設問に対する回答状況を示す。FS~NTは、第2章1節図表2-1-5の教師の指導力(FAN)の領域記号に対応する。

2 「教師の指導力」が高い教師ほど「家庭学習充実」「家庭学習と授業との連動」にも積極的に取り組んでいる

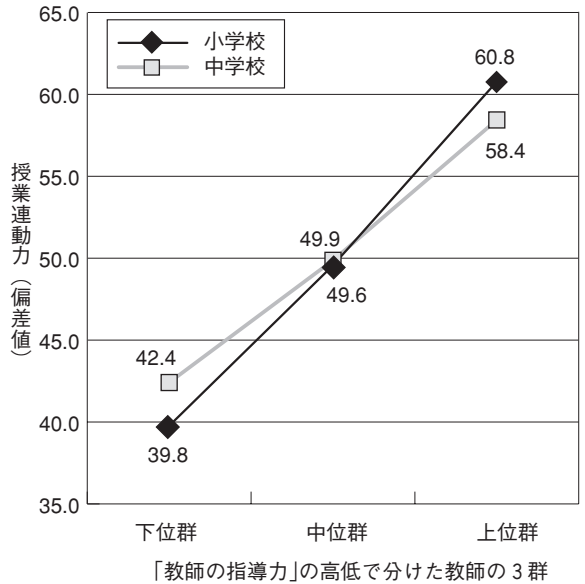
図表2-4-6ならびに図表2-4-7は、それぞれ「教師の指導力と家庭学習指導力との関係」

「教師の指導力と授業連動力との関係」を表すものである。

図表2-4-6 教師の指導力と家庭学習指導力との関係



図表2-4-7 教師の指導力と授業連動力との関係



注) 横軸の「教師の指導力」の高低で分けた教師の3群は、「教師の指導力」を問う設問(図表2-4-5)への回答合計スコアを偏差値換算し、下位群:偏差値40未満、中位群:偏差値40以上60未満、上位群:偏差値60以上として設定している。縦軸は、それぞれ、この各群に含まれる教師の「家庭学習指導力」(図表2-4-1)、「授業連動力」(図表2-4-4)を問う設問の回答合計スコアを偏差値換算したものを示している。

これら2つの図表からわかる通り、一般的な「教師の指導力」と「家庭学習指導力」「授業連動力」とはいずれも小・中学校ともに正の相関関係にあり、ふだんの授業や特別活動における「教師の指導力」の発揮が高い教師ほど、「家庭学習指導力」「授業連動力」も高い。このことから、日

ごろの授業での指導力の発揮に努めている教師は、子どもの学力向上のために、家庭学習の充実やその授業との連動による授業内容の向上にも必然的に目を向けて取り組みに向かっているという事情がうかがえる。

図表 2-4-8 家庭学習を充実させることに対する教師の自由回答状況

(%)

回答内容	学校区分		
	小学校	中学校	
家庭学習充実の意義を認める肯定的な意見	授業の充実や学びの高度化	25.3	13.3
	授業・学びへの意欲的な参画	13.7	12.7
	授業内容の定着	8.9	15.0
	自己学習力・自主的学習習慣の育成	5.8	5.2
	学習の習慣化	4.7	1.7
	学力格差の縮小	1.1	0.6
	その他	10.0	8.1
	計	69.5	56.6
家庭学習充実の悪影響を危惧する否定的な意見	学力格差の拡大	8.9	5.8
	子どもの健康悪化	1.6	1.7
	授業への予習の悪影響	1.1	2.3
	その他	3.2	2.9
	計	14.7	12.7
条件整備の課題や難しさについての意見	家庭環境の違いや個人差への対応	7.9	3.5
	授業内容の改善や教師の指導力向上	3.2	4.0
	要員・指導時間確保	1.6	4.0
	保護者の協力獲得	1.6	2.3
	塾等校外学習機会・ツールとの折り合い	0.5	1.7
	教師間の連携	0.0	3.5
	その他	1.6	2.9
	計	16.3	22.0
家庭学習の指導内容の方法に関する意見や工夫	計	8.4	7.5
その他	計	4.2	5.2

注)「家庭学習の更なる充実が授業改善に及ぼすと期待されるよい影響や懸念等があれば自由にお書きください」という設問に対する自由記述による回答内容を分類して集計したものの。各項目の割合は、この設問への回答者数(小学校:190、中学校173)に対する各項目の分類件数の割合として示している。一人が複数の意見を述べている場合は、それぞれ別の回答として分類されているため、「計」の合計は100%とはならない。また、「家庭学習充実の意義を認める肯定的な意見」や「家庭学習充実の悪影響を危惧する否定的な意見」の「計」の数値は、各意見を有する人数の実際の割合とはイコールではない。詳細は本文参照。

図表 2-4-8 は、「家庭学習の更なる充実が授業改善に及ぼすと期待されるよい影響や懸念があれば自由にお書きください」という設問への教師の回答を分類し集計したものである。この設問への回答者数のアンケート回答者総数に対する割合は、小学校:190人/877人=21.7%、中学校:173人/793人=21.8%となっている。一人の回答者が、肯定的意見や否定的意見を同時に複数書いている場合もあり、このような場合、それぞれ別の回答として分類している。図表の各項目

の割合は、本設問への回答者数(小学校:190、中学校173)に対する各項目の分類件数の割合として示している。

図表のうち、「条件整備の課題や難しさについての意見」は、家庭学習の充実が授業改善に及ぼす影響について、「授業改善や教師の指導力向上が先決」といった指摘や「指導の時間や人手の確保が必要」「保護者の協力が欠かせない」「家庭環境の違いや個人差への対応が困難」といった家庭学習の充実を進めるにあたって必要となる条件整

備的な課題やその難しさの指摘を行っているもので、家庭学習の充実が授業改善に及ぼす影響について肯定的な立場からの意見なのか否定的な立場からの意見なのかが表示されていないものである。また、「家庭学習の指導内容の方法に関する意見や工夫」についても、「小学校段階では予習より復習が大事だと考える」「基本的生活習慣の徹底が大切」「日記を活用している」「よい作文を学級通信にのせたり、教室に掲示したりして、紹介している」「子ども達が家に帰ってまでやって

みたいと思うような課題の提示を授業内で行うことを目標としている」といった家庭学習充実のための指導内容の重点や自ら実践している方法や工夫を述べているもので、家庭学習の充実が授業改善に及ぼす影響に対する価値判断が直接示されているものではない。この場合も、肯定的・否定的立場のいずれをも含むうが、すでに自ら実践している取り組みに関する記述も少なからず含むことから、家庭学習充実の授業への影響を肯定的に受け止める立場からのものが多いと考えられる。

1 家庭学習の充実の好影響を期待する声が多い

図表から、「家庭学習充実の意義を認める肯定的な意見」の合計割合は、小学校で69.5%、中学校で56.6%となっているが、上に述べたことから、肯定的意見を有する実際の人数の割合を正確に表しているものではなく、実際はこれらの数値よりも程度はわからないが大きいことに注意してほしい。「家庭学習充実の悪影響を危惧する否定

的な意見」についても、同様に、図表中の小中学校：14.7%、中学校：12.7%という数値よりも実際の人数割合は幾分か大きいであろう。いずれにしても、家庭学習の充実が授業に及ぼす影響については、否定的に捉える意見よりも肯定的な意見が圧倒的に多いことを確認しておきたい。

2 とくに「授業の充実や学びの高度化」「授業・学びへの意欲的な参画」「授業内容の定着」の効果への期待が大きい

「家庭学習充実の意義を認める肯定的な意見」の中で、割合が最も高いのは、小学校では「授業の充実や学びの高度化」、次いで「授業・学びへの意欲的な参画」となっている。前者については、「授業が発展的に展開でき、思考力や活用力が伸びる」「授業のレディネスがそろいやすくなることで、授業の導入部において、時間的短縮が図られ、本時の学習内容にかける時間が多くなり、授業が充実する」「授業中に学び方を学習し、家庭でその学び方をいろいろな課題に活用し、さらに授業で活かす。授業→家庭学習→授業というサイクルで子どもの学びをよりよいものにしていく」など、家庭学習と授業との連動で、知識・技能の定着だけでなく活用力や思考力育成にシフトした授業展開ができるとする声が多い。「授業への意欲的な参画」については、「家庭での調べ学習を生かした授業を取り入れることにより、子どもたち一人ひとりが問題（課題）意識をもって授業に参加できる」「授業中の話し合いや意見等が活発に出る」「自ら進んで家庭学習に取り組む児童

は、学校でも積極的に授業に参加するので学級全体がやる気をもって授業にのぞめる」「自分の得意・不得意が分かるとともに、興味や関心が高まり、自分が知りたいことや学んでみたいことに前向きに取り組めるようになる」などの声が寄せられている。中学校では、割合が最も高いのは「授業内容の定着」、次いで「授業の充実や学びの高度化」「授業・学びへの意欲的な参画」となっているが、この3つの割合の差は小さい。小・中学校ともに、上位の3つの順位は異なるが項目は一致している。これらがもとより相互に無関係なものではなく、密接につながり合っている課題であることの表れであろう。

「肯定的な意見」の中には、「自己学習力や自主的学習習慣」の育成に効果があるとする意見も少なくない。また、「子どもの学力の底上げが図られ学力格差の縮小につながる」という次に見る「学力格差が拡大する」という懸念とは真逆の声もある。

3 「否定的な意見」の中では「学力格差の拡大」を危惧する声が多い

「家庭学習充実の悪影響を危惧する否定的な意見」の中で、割合が最も高いのは、小・中学校ともに「学力格差の拡大」である。この意見で一番多いのが「家庭環境・家庭の教育力の差」による学力格差拡大を懸念する声であり、「宿題が多くなると、家庭の教育力がない子はますます他の子と差が開いてしまう」「学習の定着の度合いの差が家庭の教育力(援助力)の差として出てしまう」「学校に協力的な家庭、仕事等でなかなか協力できない家庭、と様々な事情があるので二極化が進んでいくのでは」等の意見である。他方、家庭環境や家庭の教育力の差に直接言及するのではなく、「生徒一人ひとりの放課後の過ごし方が多様化しており、宿題を完遂できる生徒と、提出しきれない生徒との二極化が進むおそれがある」「(家庭学習の充実は)能力的に厳しい生徒がいる」等、子どもの放課後の過ごし方(クラブ活動などによる忙しさ等)の違いや能力の個人差の視点から危惧する声もある。

また、「否定的な意見」の中には、「予習をすることで、教材との出会いの喜び、新鮮さが失われるので、興味・関心が高まらない」という「予習のマイナス面」を危惧する声や「教師の目が届かない家庭学習に多くを期待することはできない。

学校での授業を分かりやすい充実したものにしていくことを第一に考えたい」という家庭に期待するよりも授業の充実が先決とする声、「子どもが、学校、家庭で勉強に追われ、心身の健康を害してしまわないか心配である」と子どもの健康悪化を懸念する声などもある。

家庭学習の充実の取り組みを進め成果を継続的に上げていくためには、これらの「学力格差拡大」等の懸念や「条件整備的な課題や難しさ」で挙げられている諸課題が何らかのかたちで克服されていくことが必要であろう。上に見た家庭学習充実の「肯定的な意見」の割合(計)の大きさに比べて、「家庭学習と授業との連動に関わる取り組み状況」(図表2-4-4)が示す取り組み割合の低さを見ると、「肯定的な意見」も期待や願望の表明にとどまっていて実際には足が踏み出せていないケースも少なくないことがうかがえる。この背景には、やはり「条件整備的な課題や難しさ」があることや懸念の克服が課題として立ち塞がっていることが多いのではないだろうか。学校内部や、学校と保護者・地域、行政等との間で前向きに議論がなされ、今できることから取り組みが進んでいくことを期待したい。

おわりに

これまで報告してきた項目以外にも、今回実施した調査の項目には「授業改善の重点的な取り組み(R-P-D-C-A段階別)」「宿題の出題頻度」「平日・休日の宿題時間の設定」「宿題教材の種類」「宿題や家庭学習として取り組ませている内容」「宿題への効果認識」等も含まれている。紙幅の

関係で割愛させていただいたが、関心のある方はこれらの基礎集計がBenesse教育研究開発センターのサイトに掲載されているので参照してほしい。また、教師の取り組みと子どもの学力との関係の分析は、次章で展開する。